◆昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム 3 館連携企画展

「昭和 100 年」関連施策実地レポート

このコーナーでは、内閣官房「昭和 100 年」関連施策推進室の室員が、各地で開催されている関連施策を訪問し、感想を含め皆様へご紹介します。

今回の訪問先は、富山県富山市にある富山市民プラザで開催された、昭和館、しょうけい館、帰還者たちの記憶ミュージアムによる「3 館連携企画展」です。

「3 館連携企画展」

URL：https://www.showakan.go.jp/junkai/kurashi-toyama/　（昭和館）
https://www.shokeikan.go.jp/event/region/past/2026/1（しょうけい館）
https://www.heiwakinen.go.jp/outsiteevent/20260630-1030/（帰還者たちの記憶ミュージアム）

「昭和館」は、先の大戦における戦中・戦後の国民生活の労苦を伝えるとともに、昭和の時代に国民が経験した戦争の記憶を継承し、「しょうけい館（戦傷病者史料館）」は、戦傷病者とそのご家族が体験した労苦を語り継ぎ、そして「帰還者たちの記憶ミュージアム（平和祈念展示資料館）」は、兵士や戦後強制抑留者、海外からの引揚者の体験を次世代へ継承する施設であり、いずれも東京に所在しています。

戦後 70 年を迎えた 2015 年以降、これら 3 つの施設が手を携えて地方巡回展を行ってきており、昭和元年（1926 年）から満 100 年を迎える節目に当たる今年は、令和 8 年（2026 年）9 月 3 日から 13 日まで富山市民プラザを会場に合同企画展が開催されました。会場では、東京の本館が所蔵する貴重な実物資料や解説パネルの出張展示に加え、富山県にゆかりのある方々の実物資料や写真、証言映像などが数多く紹介されており、地域の視点からも先の大戦の記憶に深く向き合える構成となっていました。本レポートでは、各館における展示内容や現地の様子等について、訪問順にご紹介いたします。





Ⅰ　帰還者たちの記憶ミュージアム「平和祈念展 in 富山　～絵画とモノ資料で伝えるシベリア抑留の記憶～」

◆昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム 3 館連携企画展

帰還者たちの記憶ミュージアムの展示ブースでは、先の大戦が終わった後にもかかわらず旧ソ連軍により、極寒のシベリアやモンゴル等へ強制連行された人々（戦後強制抑留者）の過酷な運命に焦点を当てた展示がなされていました。劣悪な生活環境下で強制労働に従事させられ、抑留された約 57.5 万人のうち、約 5.5 万人の方々が命を落としました。旧ソ連参戦後の混乱から抑留の始まり、マイナス 30～40 度に達する極寒環境下での過酷な強制労働、食糧の不足、粗悪で不衛生なラーゲリ（収容所）での生活実態、そして祖国への帰還を信じて生き抜いた人々の歩みが、抑留者が自らの記憶を呼び起こして描いた絵画や実物資料、模型などを通して生々しく再現されていました。

数ある展示のなかで目を引いたのが、「袖なしの防寒外套」と、触れる展示として再現された「黒パンと飯ごうのスープ」の復元模型です。極寒の地における防寒具は自らの生命を守る最後の砦であったはずですが、極限の飢えに直面した元抑留者の方が、あまりの空腹に耐えかねて外套の両袖を取り外し、現地の労働者が持っていたパンと交換してもらったという背景を持つその実物外套は、極限状態の壮絶さを何よりも雄弁に物語っていました。また、薄い塩味しかしない水のようなスープと黒パン一切れという、過酷な重労働に見合わないわずかな食事の復元模型を目の当たりにし、ただただ胸の詰まる思いがしました。

さらに会場では、満洲で終戦を迎えた後に 2 年間にわたりモンゴルのウランバートルなどで過酷な抑留生活を強いられた、富山県南砺市出身の山田秀三さんの証言映像が上映されていました。山田さんは一般財団法人全国強制抑留者協会会長や同会富山支部長を務め、長年にわたり戦友たちの慰霊や抑留の歴史を語り継ぐ活動に尽力されてきました。108 歳を迎えられた現在でも、異郷の地に倒れた犠牲者たちを決して忘れることなく平和を訴え続けるその生きた証言と熱い眼差しからは、筆舌に尽くしがたい苦難の重みがひしひしと伝わってきました。

職員の方にお話を伺ったところ、「来館者の中には、親族に抑留を経験された方がおり、生前は詳しく語られなかったその境遇を具体的に知りたくて来場されたという方もいらっしゃいます。戦争や抑留を身近に知る人がいなくなっていく若い世代にも、この過酷な事実をしっかりと受け継いでいってほしいです」とお話ししてくださいました。そして、「戦前の約 20 年間と終戦直後の時期の出来事は、昭和の歴史を振り返る上で決して欠かすことのできない重要な記憶です。この時期の苦難の歴史が次の 100 年の平和を築く確かな道標となるよう伝え続けたいですし、本展が平和な社会のあり方を皆様と共に考える契機になればと願っています」と、力強く語ってくださいました。





◆昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム 3 館連携企画展





II しょうけい館「戦傷病者の労苦を伝える～富山展～」

続いて、しょうけい館の展示ブースでは、先の大戦で負傷し、あるいは病に冒されながらも、戦中・戦後の長い年月を不自由な身体と共に生き抜いた戦傷病者の方とそのご家族の労苦が紹介されていました。会場には、戦傷病者の方から寄贈された義足や義眼、義指をはじめ、軍人傷痍記章や傷痍軍人証、さらには昭和 16 年（1941 年）に開所し機能回復訓練を担った富山県内の「傷痍軍人宇奈月温泉療養所」の写真など、地域に根差した資料なども幅広く展示されていました。

特に心を打たれたのは、富山県出身の戦傷病者とその家族に焦点を当てた展示と証言映像です。右肩と右足に銃弾を受けて痛みを抱えながらも、除隊後に国鉄や役場で仕事を続けた方の体験、仕掛け地雷により左足を貫通され、復員後も痛みを抱えながら「痛いと言い出したらきりがない」と黙々と農業に打ち込んだ方の体験、左脚のひざ下から切断し義足で生活していた夫のもとへ嫁ぎ、雪道で義足の夫が歩きやすいよう毎日雪かきをして帰りを待ち続けた妻の歩みなど、戦後も生涯にわたって続いた苦闘が克明に綴られていました。ブースで上映されていた証言映像には、過酷な体験の事実のみならず、それを語りかける本人の表情や声の抑揚、息遣いまでもが克明に刻まれており、文字資料だけでは捉えきれない切実な思いが胸に迫り、より深い実感をもって受け止めることができました。なお、東京・九段にあるしょうけい館本館においても、富山県関連の貴重な収蔵資料が多く保存・展示されているとのことです。

職員の方からは、「義足などを初めて目にするお子さんたちは強い衝撃を受けています。また、ご自身のお父様が戦傷病者であったというご遺族の方なども訪れ、真剣な眼差しで食い入るように展示を見つめていらっしゃいました」と伺いました。また、「数ある資料の中でも、本人の肉声や表情が残る証言映像はかけがえのない貴重な記録であり、一人でも多くの方に見ていただきたいです。先の大戦では心身に深い傷を負った方が数多く存在しましたが、戦後 81 年が経過し、戦争体験者が減少の一途をたどっています。「昭和 100 年」という節目を迎えた今、次の 100 年に向けて、こうした先人たちの苦難と再起の歩みをよりリアルに語り継ぎ、確かな平和へとつなげていかなければなりません」とのお話をいただきました。

◆昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム 3 館連携企画展









Ⅲ 昭和館「くらしにみる昭和の時代～富山展～」

最後に、昭和館の展示ブースでは、「Ⅰ. 戦時下のくらし ～日中戦争・太平洋戦争の時代～」と「Ⅱ. 戦後復興のあゆみ ～占領期から高度経済成長期の時代～」の 2 部構成で昭和のくらしを紹介する展示がなされていました。

第 1 部の「戦時下のくらし ～日中戦争・太平洋戦争の時代～」では、富山県内で国民学校の教員を務めていた方の資料を中心に、過酷さを増す銃後の生活が紹介されていました。出征する教員の方に女生徒たちから贈られた千人針や、父親の羽織を仕立て直して作られた学生服、学童疎開、さらには市街地の 99.5%が灰燼に帰した昭和 20 年（1945 年）8 月の富山大空襲に関する資料などが展示されていました。

なかでも目を引いたのが、革や金属の極端な不足を補う代用品として作られた「竹製のランドセル」や「陶製のアイロン」です。厳しい物資統制のなか、工夫を凝らして日常生活を成り立たせようとした当時の人々の知恵と、そこまで追い詰められていた戦時下の窮状がひしひしと伝わってきました。

第 2 部「戦後復興のあゆみ ～占領期から高度経済成長期の時代～」では、昭和 20 年（1945 年）8 月 15 日の玉音放送によって敗戦を知らされた時から、占領期の混乱、そして高度経済成長期を経て日本が復興を遂げていく過程が描かれていました。

衛生環境の改善のために用いられた DDT 噴霧器とともに、展示の中で特に強い印象を残したのが、闇市で売られていた食事例として忠実に再現展示されていた「残飯シチュー」の食品サンプルです。進駐軍の残飯などを大鍋で煮込んだこのシチューには、混入していたタバコの吸い殻の包み紙まで再現されており、飢えをしのぐためにあらゆるものを口にせざるを得なか

った終戦直後の過酷な現実と、それでも懸命に生を繋ごうとした庶民の逞しさを感じました。その一方で、昭和21年（1946年）の女性参政権獲得を伝える戦後初の衆議院選挙ポスター「われらの選挙」や、プロ野球の熱気を伝える特報ポスター、昭和30年代に家庭へ普及し生活を一変させた電気炊飯器など、人々が希望を見出し力強く前を向いて歩み始めた時代の息吹を実感できる展示も充実していました。

職員の方にお話を伺ったところ、「地方巡回展にあたっては、その地域の方々に歴史を身近に感じていただけるよう、開催地にゆかりのある実物や写真を数多く盛り込む工夫をしています。当時の新聞記事も、地元紙が残っていれば必ず選定しており、今回も「北日本新聞」の記事を展示いたしました」と教えてくださいました。また、「庶民のくらしの記憶は、何もしなければ歴史の波のなかに埋もれてしまいがちです。戦中・戦後の人々のくらしを教科書の活字だけで終わらせるのではなく、生活感のある実物を通して肌身で感じ取っていただくためにも、今後も地道に発信を続けていきたいです」と、前向きな決意を語ってくださいました。

なお、本展示の一角には富山県遺族会による展示コーナーも設けられており、地域で戦没者追悼と記憶の継承を支えてこられた方々との緊密な連携の様子もうかがえました。









今回の3館連携企画展の訪問は、先の大戦によってもたらされた戦中・戦後の多大なる労苦と、そこから歯をくいしばって立ち上がり、暮らしを再建し、復興へと繋げていった戦後の歩みについて、多角的な視野から深く学ばせていただく貴重な機会となりました。

◆昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム 3 館連携企画展

昭和館、しょうけい館、帰還者たちの記憶ミュージアムという、それぞれ異なる側面から戦争の記憶を伝える 3 館が連携し、ひとつの会場で企画展を開催するためには、展示の時期や場所など様々な点について調整が必要になりますし、3 館で定期的に連携会議を行っているとのことです。確かに労力はかかりますが、この 3 館連携の企画展は、それぞれ単体の展示を見るだけでは捉えきれない、戦中から戦後へと連なる労苦の全体像を相互補完的に俯瞰することができ、来場者が戦争の諸相を立体的に理解する上で極めて意義深い取組であると実感しました。また、東京の本館に足を運ぶ機会が限られる地方都市において、地域ゆかりの資料を交えて出張開催することは、各地への確かな情報発信と、全国規模での記憶の継承・認知度向上に大いに寄与するものと考えます。

激動の昭和の始まりから満 100 年を迎える今、過酷な時代を生き抜いた先人たちの体験を風化させることなく、未来の平和へとつなげていく責任を改めて強く認識させられました。今回の訪問を通じて得た学びを胸に、私自身も機会を捉えて東京にある 3 館の本館をそれぞれ訪れ、より詳しく知見を深めていきたいと強く思いました。

【昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム 3 館連携企画展】
会期：令和 8 年 9 月 3 日（木）から 9 月 13 日（日）
主催：昭和館・しょうけい館・帰還者たちの記憶ミュージアム
住所：富山県富山市大手町 6-14（富山市民プラザ）